

## 詩と自然——宮澤賢治の世界観・宇宙観

短期大学部 大八木 敦彦

今日のこの題名は実は私が付けたのではなく、茅ヶ崎市の担当の方——教育委員会の方でしょうか——が、最初に大学の講義概要を見て、考えて下さったのです。私の方で好きなように直して下さいと言われたのですが、実に見事な題名で、是非もうこのまま使わせて下さいと、こちらからお願ひしたくらいです。で、その時はこういう立派な題名をいただいたことが、本当に嬉しかったのですが、後で考えると、題名があんまり立派で、私の話の内容が追いつかないのではないかと心配になりました。とにかく世界観、宇宙観という大きな題名ではありますが、今日の話が、皆さまが宮澤賢治の作品を読む上でのひとつのご参考になれば、と思います。

宮澤賢治について考える際に、この題名が実にぴったりだというのは、宮澤賢治の作品では常に、人間よりも自然が主人公になっているからです。人間は脇役の方というか、むしろ主役である自然の背景に過ぎない——というのも、宮澤賢治という詩人が人間よりも自然の方に近い存在だったからです。おおざっぱな言い方になりますが、小説というのは、だいたい人間のことを書きます。人間に対する興味が第一の世界です。でも人間よりも自然の方が大事な人は詩を書くわけです。というより、書くものが詩になってしまふ。更には言えば、詩人は、人間を書く時でもそれを一種の自然物として扱う。それゆえ自然が詩的なものであるとすれば、人間は本来散文的な存在だということもできるかと思えます。

そういうわけで、自然についてお話しするとなるとどうしても、自然の景色を見て頂かなくてはならない。ですから、今日は私はあとで、賢治が生まれ育って、そしてこよなく愛した岩手の風景のビデオをご覧頂こうと思って準備して来ました。このビデオは今年の八月に私が、今日皆さんに見て頂くために撮影してきたもので、一つは賢治の生きた道筋といえますが、生涯の跡をたどるもので、もう一つは作品の背景——というより主人公のものになっている風景を写したものです。岩手には実際においてになった方も沢山いらっしやると思いますが、同じ風景を見るにしても、またビデオや写真に撮るとしても、やはりその人なりの視点というものはあ

るはずで、これは私なりの賢治の風景として後程、ご覧頂ければと思います。

さて、自然をうたう詩と言っても、実際は色々なスタイルがあります。賢治の場合、特徴的なのは、歌われているのが一般的な自然ではなくて、どんな場合でも、ある時のある場所の自然に特定されているということです。

例えばここにこのような歌——短歌があります。

ふるさとの山に向かひて

言ふことなし

ふるさとの山はありがたきかな

これは皆さまも御存知かと思いますが、石川啄木の有名な短歌です。啄木の最初の歌集『一握の砂』に収められています。宮澤賢治は岩手県の花巻市の出身ですが、啄木も岩手の出身で、彼は渋民村——盛岡市のすぐ北にある今の玉山村が故郷です。ですからここで「ふるさとの山」と呼ばれているのは岩手山だと思つて間違いありません。盛岡の一带からは岩手山が眼の前に見えますから。けれどもこの歌を読む人にとつては、それはそんなに気にしなくともいいことで、啄木もそのつもりで書いている。山国に生まれた人には皆、それぞれにふるさとの山というのがあはずで、この歌を読む人は、その人なりのふるさとの山を思い浮かべていいわけです。

例えば、茅ヶ崎にお住まいの方なら、富士山でしょうか、それとも大山でしょうか。まあ、茅ヶ崎というと山より海ですから、ふるさとの海と言った方がいいかも知れない。啄木だったら、ふるさとの海はありがたきかな、と書いたでしょうね。私は福島の子の生まれなので、何と言つても磐梯山です。それで、田舎に帰る時に、鉄道でも、自動車でも、長いトンネルをいくつも抜け、最後のトンネルから出て、いきなり磐梯山が目の前に現れると、ああ、ふるさとの山は本当にありがたいなあ、と思います。全く啄木の歌の通りだと思います。

ところがこれが宮澤賢治の場合だと随分違います。第一、賢治は、山というようなあいまいな呼び方はふつうしません。岩手山なら岩手山とはつきり呼ぶ。賢治が記した（詩や童話だけでなく手紙も含めてなんですが）山の名の数を調べた人がいて、それによると、九十八もあるそうです。そのうち岩手県内の山が八十二で、作品に繰り返し使われている山の名前だけをひろつても三十くらいはあるそうです。その上、彼は化学、地質学が専門ですから——大学は今の岩手大学の農学部を出ていますから——山の一つ一つの素性までよく知っているわけです。どのようなタイ

プの火山であるとか、どのような地質をもち、どのような岩石や鉱物を産出するかとか、まず尋常の文学者ではおよびのつかない科学的知識を持って山のこと——のみならず動植物や気象やさまざまの自然物を作品に書き込んでいます。例えば、賢治が作品に書いた鳥の種類を数えた人もいます。それによると童話の方には五十六種、詩には六十九種出てくるそうです。これだけの種類の鳥を書き分けられる詩人は世界中を見渡しても他にいないのではないのでしょうか。

さて、山の方に話を戻しましょう。賢治にも岩手山を歌った詩はもちろんあります。それどころか、数ある山の中で賢治が最も愛したのはおそらく岩手山でしょう。これは二千メートルを超える岩手県で最も高い山ですが、賢治は百回以上登っていたという人もいます。それで詩にも何度も書かれていますのですが、中でも有名なのは次の詩だと思います。

### 岩手山

そらの散乱反射のなかに  
古ぼけて黒くゑぐるもの  
ひかりの微塵系列の底に  
きたなくしろく澱むもの

私がこの詩を初めて読んだのは高校生の頃で、国語の教科書に出ていたのですが、正直言って、この詩はまったくわかりませんでした。なんて難しい詩だろうと思いましたが、けれど、だいぶあとになって岩手に行って、実際に岩手山を見て、ああなるほど、と思ったんです。

岩手山は岩手片富士とか南部片富士とも呼ばれて、富士山のように秀麗な山ではありませんが、山の頂から裾野にかけての肩の下がり具合が左右で非常に違って、片方の肩——写真などではたいい左肩——がほいたいかなうようになだからで、ずんぐりとした尾根になっている。だから片方だけの富士というわけで、全体に鈍く重い感じを与える山です。それは、確かにまぶしい空を鋼の刃のように「黒くえぐるもの」であり、また時には薄汚れたように「しろく澱むもの」という形を備えています。

私の郷里の磐梯山も、会津富士と言われるくらい見事な山ですが、磐梯山は山頂がすつきりとがっついていて、富士山よりも細く天を指して、大変に優雅で女性

的なやさしい感じの山です。だからどうしてもえぐったり、澱んだりという感じにはならない。山と言えば自然に磐梯山のことを思い浮かべていた私には、賢治の「岩手山」はどうもピンとこなかったのです。つまり、この「岩手山」という詩を本当に味わうためにはやはり本物の岩手山を見ることが必要だと思ふのです。同じことが賢治のどの作品にもある程度あてはまるわけで、そのような理由で賢治の作品と、岩手という土地はどうしても切り離せないのです。

ところで、さきほど石川啄木の話をしました。賢治と啄木というのは意外に深いつながりがあります。賢治も啄木も、盛岡中学校の出身で——旧制の中学校ですが——啄木の方が賢治より十年ほど先輩になります。賢治が中学生の時に、啄木の歌集『一握の砂』等が発表されていて、賢治は読んでいるはずですが、賢治の文学的な出発というのは短歌で、中学に入った頃から沢山書き始めています。千首以上作っているようです。それが、ちょうど詩を書く準備段階にあたっているわけですが、それらを読んで啄木のと比べると、この二人の違いがよくわかります。

それについては賢治の短歌を出して比べても良いのですが、それよりも、先ほど岩手山をテーマにした啄木の短歌と賢治の詩とをご紹介しますので、それでもう、皆さんはつきりとおわかりになったかと思ひます。一言で言えば、啄木の作品は何よりも感情表現なんです。山よりも、山を見ている自分の気持ちが大変なんです。それに対して賢治は、自分の感情は全くと言っていいほど表していない。そのかわりに、山がどういふふうかということにとことん眼を凝らしている。感情ではなく感覚の世界です。

賢治は幼い頃から、彼独特の自然観察の眼をあたりに注いでいるうちに、ある重要なことに気づいたと思われまします。それは、自然が刻々と変化して一時も同じ姿をとどめてはいないということ。従って、いつもは美しくそびえる山であるものが、ある時は忽然としてえぐるものになったり、またどんより澱むものになったりする。つまり、あるひとつの同じものでありながら、瞬間ごとに違うものにならんと変わっていくということ。賢治はそこで、時間という、この世界の巨きな謎に直面したのです。

賢治が中学生の頃の、大変面白い逸話が残っています。遠足とか旅行とかに行くのと、行った先で賢治は短歌を作ったそうです。それを葉書に書いて、せっせとポストに出しているの、誰に出しているのか不思議に思つて友達が尋ねると、賢治は、自分の住所と名前を書いて出していたんです。自分で自分に葉書を出していたわけです。どうしてそんなことをするのか、友達が訊くと、こうして出しておくと帰っ

てから読んで、今の感激がそのまま味わえる、こんな素晴らしいことはないじゃないか、と答えたそうです。つまり未来の自分にあてて現在の時間を送っていたわけです。また、瞬時に過去になって失われてしまう現在を、その時々々に現在のまま保存して置いたとも言えます。そういう意味で、賢治は時間を操る方法を考え出したのであり、詩文によつて過去や未来と行き来しようとしたのです。

こういう態度は勿論、後で詩を書くようになってからも続いたわけで、賢治の詩はすべて、基本的に日付が付いています。その意味で詩は、彼の日記であったと言ふこともできます。

この点で非常に面白いのは、賢治と他の詩人たちでは、この時間と空間に対する態度が正反対ではないかと思われることです。つまり、詩人というのは誰でもまず、永遠というものを願つて歌うわけです。そうすると、自分が歌おうとする現実の時間、空間をある程度一般化するというか、現実から切り離したいと思う。つまり、ふつう詩人は詩を書く時に、なるべく現実の時間や空間から離れるように意識が動くように思います。例えば先ほどの啄木の短歌ですと「ふるさとの山」という表現を用いているのは、一種の空間の一般化です。「ふるさとの山」と言うことで、現実の岩手山から切り離していると言えます。それから時間にしても、この出来事が、現実の何月、何日、何時のものということはあまり問題にしない。啄木がこの歌を書いたのは、久しぶりにふるさとに帰った日なのでしょうが、ここではそれだけがわかればいい。更に言えば、帰るたびごとにこう感じるということも可能で、この体験は繰り返しがきくわけです。

けれども、賢治の場合はそうはいかない。先ほどの詩、「岩手山」には実は、一九二二年六月二十七日という日付が付いている。この詩が収められている『春と修羅』という詩集を見ると、目次の頁に、すべての詩の題名の下に日付がつけられています。ですから、この岩手山は一九二二年の六月二十七日に賢治が見て感じた岩手山に限定される。他の山であつてはいけなしいし、他の日であつてもいけない。この世で一つきり、そして一度きりの光景で、繰り返しはきかない。従つて、これを読む人は賢治のいた空間、そして賢治がこの岩手山を見た時間の方へぐっと引つ張られて連れて行かれる感じがする。一九二二年六月二十七日の岩手山の前へ、今この場から、瞬時に移動することになる。八十年前の、ここからおよそ七〇〇キロメートルも離れた場所へ。詩によつて、時間と空間を移動することができるわけです。賢治が四次元の芸術と言つたのは、そういう意味だと思えます。私たちがいるこの空間の三次元に、時間の一次元を加えて四次元になるわけですが、そういう四次元の

感覚で鑑賞される芸術と言うことです。

このように、空間と時間を扱う詩、そして自分の感情を吐露するよりも、外部の自然の姿をひたすら追い求めて写し取ろうとする詩は、それ以前にはありませんでした。賢治もそれを意識していたので、自分の書くものを詩とはちよつと違うものと考えたんです。賢治の活躍した大正から昭和の始めにかけては詩の盛んであった時代で、北原白秋、室生犀星、萩原朔太郎という大変に仲の良い、そして日本の近代詩を代表する三人が生きて活躍していました。賢治は生前は全く無名で、当時の中央の詩壇からも遠く離れた場所にいたわけで、おまけに彼の書いていたものはふつうのタイプの詩ではなかったわけです。で、彼は自分の書くものを心象スケッチと名付けました。この言葉には今でも色々な解釈がありますが、心象とはイメージのことですから、外部の自然が賢治の眼のレンズを通して心のスクリーンに映し出された、その映像を言葉でスケッチしたもの、と考えて間違いはないでしょう。

さて、この心象スケッチについて考えると、どうしても賢治の宗教のことにふれなければなりません。賢治は法華経——日蓮宗を信奉していました。それもふつうの信者ではなく、家族を改宗させようと大変に苦しんだ——宮澤家は浄土真宗でしたから——全く狂信的なくらい熱心な信者でした。

ですから賢治は本来は科学者であつて、同時に信仰者であり、職業としては農業をして、そのすべてを詩や童話に書き表す芸術家であつたわけで、貫くものはひとつでありながら、非常に多面的な人でした。宗教家としての賢治については後半でお話しします。

## 二

賢治には非常に誤解されやすい点がいくつかあります。まず、貧乏ではなく、それどころが大変に裕福だったことです。これは先程ビデオで、賢治の生涯を簡単に見ましたので、お分かりいただけたかと思いますが、宮澤家はとにかく、父方も母方も大変なお金持ちでした。だからこそ、賢治はまずしい農民のために身を捧げようとしたわけですが……。でもとにかく、実家の財産力は強かったので、それが彼の生活には必ず現れています。

例えば、花巻農学校で先生をしていた時も、実家から通っていて生活費は出さなくても済んだので、給料を全部、自分の好きなことに使えたのです。それで、あの頃としては大変に珍しい蓄音機とかレコードとか楽器とかどんどん買えた。当時、

東京にあったレコード会社が、岩手の片田舎から次々とレコードの注文があるので、不思議に思ったけれど、とにかく沢山売れるので感謝状を出した、という逸話が残っています。それから、賢治が詩集を出したけれど、さっぱり売れなくて出版社が困っています。それと、それを自分で買い取るためにお父さんから三〇〇円のお金をもらっています。当時の三〇〇円というと大金です。賢治が農学校の先生になった時の初任給が八〇円でしたから。当時の所謂サラリーマンの初任給は五〇〜六〇円だったそうです。今の初任給を一五万円位とすれば、当時の一円は三〜四千円の計算になります。そうすると二十五歳で教員になった賢治の初任給は三〇万円位ですから相当高給取りですね。お父さんから三〇〇円ももらったというのは、一〇〇万円位をポンと出してもらったことになります。羅須地人協会の時も、自分の家の別宅を使わせてもらっていますし、無理がたたって病気になる、実家に戻って、看病して貰えた。そういう意味では、実に恵まれた環境にあったわけです。賢治は職業のことで、宗教のことで、生涯、父親に反抗し続けて——実際、賢治の一生は父との戦い、相剋の一生であり——そういう話をふつうに聞くと、賢治が大変善人なのに対して、父親は悪人のように聞こえることもあります。実際は、このお父さんは、結局は、わがままな長男である賢治の希望をすべて叶えながら、最後までその面倒を見たわけですから、非常な人格者であったと思います。

賢治が裕福だったということで、ついでに申し上げますが、「銀河鉄道の夜」には御存知のように二人の対照的な少年が登場します。ジョバンニとカムパネルラ。ジョバンニの方は貧しい家の子で、父親がいなくて——監獄に入っていると匂わせる記述があり——母親は病気で寝たきりで、ジョバンニ自身が夜、働いて家計を助けている。一方カムパネルラの方は裕福なお坊ちゃん、お父さんは博士と記されています。賢治は一般には、主人公のジョバンニであるというイメージが強いかもしれませんが、実際の境遇としては賢治はカムパネルラにずっと近いわけです。そして自分の境遇をカムパネルラからジョバンニの方へ移していこうというのが、「銀河鉄道の夜」のモチーフの一つと言っても過言ではない。だからこそ、友達を救うために自分を犠牲にしたお金持ちのカムパネルラは、銀河鉄道に乗って宇宙の果てに消え、どこへ行ったかわからないと書いてある——つまり、それによって賢治が、カムパネルラのような境遇に生まれ育った自分自身を葬り去ったとも言えるのです。そうして、貧しいジョバンニに生まれ変わった賢治は、自己犠牲が「ほんとうのさいわい」かどうか疑いを抱いたまま、星空をひとめぐりして、この世界へ帰ってくる。

さて、誤解されやすい点の二つ目ですが、賢治は、大変ハイカラでモダンな趣味

と、あふれるようなユーモア精神を持っていたことです。これも、本来が裕福であったことが原因の一つですが、とにかく当時の東北の田舎町の間人として驚くくらい、舶来趣味があつた。鉛筆も光学器械もドイツ製を愛用していました。またお坊ちゃんとしての、品のよさと明るいいたずらっぽさがあつた。童話の方を読むと特に、描写が非常にユーモラスであることにお気付きになられることと思います。弟の清六さんの記憶によると、賢治は映画も好きでよく見ていたようですが、チャップリンには特に強く惹かれていたということです。そう思って賢治の童話を読んでもみると、無声映画時代のチャップリンの映画のシーンが随所で思い浮かんでくるのではないのでしょうか。

賢治について、このような誤解がなせ生じやすいかということ、やっぱり「雨ニモ負ケズ」のせいですよ。いかにも貧しくつましく農業をしながら、苦しく悲しい一生を送つたような……

確かに、賢治の理想はそうでしたが、それは、賢治が生涯の最後の頃に——この詩が書かれたのは死の二年前ですが——たどり着いた境地なんです。だから「雨ニモ負ケズ」は順序から言うと、本当は最後に読むべき作品なんです、たいていの人はまずあれを最初に知ってしまう。岩手に行くとおみやげのれんとかタオルに必ず書いてあります。饅頭や煎餅にまで「雨ニモ負ケズ」と書いてありますからね。それで、賢治のことを誤解してしまうんです。

余談ですが、この「雨ニモ負ケズ」には、一大文学論争がありました、昭和三十年代に谷川徹三と中村稔が論じ合った。谷川は、これを近代詩の中で最高の作品と評価しました。近代の詩人がこれほど理想的な生活と、高い精神性を示した例はない、と。それに対し中村は、これは賢治の詩としては駄作の方だ、と反駁したので。立派なことが書いてあるから立派な詩とは限らない、というわけです。谷川は本来哲学、倫理学の人ですから、詩の道德性、精神性を重んじたのに対し、中村は文学性、芸術性の面からもの足りなさを感じたのです。確かにどちらの言い分にも一理はあるでしょう。

私の意見としては、「雨ニモ負ケズ」に深い感動があるのは確かですが、ただ、賢治にすればおそらく、「雨ニモ負ケズ」は、彼本来のスタイルである心象スケッチとして書いたものではなからうと思います。つまり、近代詩としては確かに傑作ですが、賢治の作品の中では必ずしも優れた作品ではない、という不思議な言い方をせざるを得ない。まあ、賢治の心象スケッチがいわゆる詩の概念からはみ出ているのであれば、それも不思議ではないわけですが。しかし、いずれにしてもこれが、彼



の詩としては一番有名になってしまったわけですから、皮肉なものです。

なぜこれが有名になってしまったかという点、やはりわかりやすいからだと思います。「雨ニモ負ケズ」は賢治の他の詩に比べて表現が平易で格段にわかりやすい。むしろ他の詩のスタイルとは随分違う、異色の作なんです。他の詩が難しいのに比べて、非常にわかりやすい。それから感傷的な要素が強いということもあると思います。感傷的というのは、往々にして通俗的あるいは大衆的なものになりやすいので、純文学の世界ではそういうものは避けたがるのですが、逆に言えば、ポピュラリティのためには感傷的な味付けも必要なわけです。

そういうわけで、わかりやすい「雨ニモ負ケズ」の印象が非常に強い。それから「銀河鉄道の夜」ですよ……この二つが有名になったので、宮澤賢治というと、貧しくつましやかな上に、非常にロマンチックで夢のある世界を描くようなイメージが濃くなってしまった。

実は、賢治についてここでも大変に誤解されていると思うんです。つまり、賢治はロマンチックな人だと思われやすいが、決してそうではない——なるほど理想家ではあるが、彼の理想というのは現実を実に厳しく見ていたからで、基本的にはリアリストでした。本当の理想家は常にリアリストです。繰り返して言いますと、賢治はお金持ちで、ハイカラでユーモアがあつて、そして最高のリアリストだったんです。

もつとも私が賢治をリアリストというのは、例えば、仏陀——お釈迦さまがリアリストであつたというのと同じ意味ですが。仏さまは、何よりもこの世界をありのままにみることによつて、悟りを開こうとした——つまりこの世の実像が見えないのが迷いの始まりであり、実像を知ることによつて解脱できると。で、お経には色々な教えが書いてあるわけですが、私は仏教の専門家ではありませんし、今日は文学の話なので、文学者によるお経の解釈をご紹介します。

例えば、近代における批評の第一人者、小林秀雄は次のように言っています。観無量寿経というお経によれば、極楽とは死後の世界ではないし、どこか空の彼方とか宇宙の彼方にあるのでもない。実はこの私たちの住んでいる世界こそが極楽浄土なのであり、極楽浄土とは、目を鍛錬するに従つて、目の前にありありと見えてくるものだ、と。

最初は石ころだとか花だとか、そのへんのものをよく見てみる。するとそういうものに思いがけない美しさのあるのがわかつてくる。石ころが宝石のように輝いて見えてくる。花が極楽浄土の花であるように見えてくる。そうしてあたりのものを

よく見ているうちに、本当はあたりに沢山の仏さまがいらっしやるのが見えてくるようになる。

そこで、小林秀雄はこうも言っています——念仏と見仏は同じことだ、と。確かに、極楽に行く——涅槃とは、決して死ぬことではありません。仏の教えでは、生き物は死んでも輪廻によってそのうちまた別のものに生まれ変わる。だから死は、何の救いにもならない。救われるためには——解脱するためにはむしろ、生きている間がチャンスなのです。解脱とは輪廻を——つまり生死を越えることです。それなら解脱とは我々の意識の改革に他ならない。小林秀雄の論で行けば、信仰とは一種の想像力ということになります。想像力というと一般には、ありもしない夢を思い描くことのような感じがしますが、それは空想というのです。想像は逆です。私たちは普通、現実を見ていると思うが、実はそうではない。それどころか何も見てはいない。現実の本当の姿は普通に見ているだけでは見えてこない。現実を本当に見るには、心の目、即ち想像力によるしかない。言い換えれば、想像力というのは、本当の自然の姿、真の現実をみる力なんです。だから想像と空想は全く違う。想像力によって作り出された芸術作品に我々が感動し、幸福を感じるのはそういう理由によるのです。芸術によって極楽浄土を感じているわけです。芸術と宗教は同じものだ、と賢治は言っています。

賢治は法華経の中でも特に「如来寿量品」を重んじたのですが、ここには如来——仏が常にこの世界にいる、と書かれています。ただ、仏はいるのだけれども、あまりに簡単に見えてしまうと、皆、安心していい加減な生活を送ってしまうので、わざと簡単には見えないようにしている。だから信心を強くして見ようと努める者には、必ず見えるのだ、と。

ドイツの作家、ヘルマン・ヘッセには「シッダールタ」という仏教的な小説があります——お釈迦様の本名は、ゴータマ・シッダールタです——その中で、同じようにこの世界の秘密を解き明かしています。彼もまた石について語っています。私たちは道端の石ころでさえ尊ばなければならぬ。石は長い時間の間に土になるだろう、そこに種が落ちて植物が生えることもあるだろう。それが樹になり実がなれば、動物が食べ、人間も食べる。そのような人間がやがて仏になることもあるだろう。だから石も尊ばなければならぬ——そう考えるのは実は誤りだ、とシッダールタは語るのです。石は今石であって、同時に土であり植物であり人間であり仏である。石をいつか仏になるものと思ってはならない。石は石のまままで仏であると感ぜなければならぬ、と言うのです。つまり、この現実世界は決して不完全なもので

はないということですが——完全になる途中にあるのでもない。世界は既にこの瞬間において完全なものだ。もっと仏教に即して言えば、世界は既に仏で満ちあふれている。それをよく感ずることが必要だ、と。私たちが世界を不完全と感じるとしても、不完全なのは世界の方ではなく、実は、それを見る私たちの目、そして私たちの心の方が不完全なのです。それゆえ、ヘッセはシッダールタにこのように言わせています——この世界ではすべてが良く、あるものは皆、素晴らしい。

賢治の童話集『注文の多い料理店』の広告文は、賢治自身が書いたものと思われませんが、そこにこういう一文があつて、ヘッセの言葉と大変よく似ています。「罪やかなしみでさへそこ（イーハトブ）では聖くきれいにかがやいている」。「イーハトブ」は御存知のように「岩手」をエスペラント語風に読み替えた言葉ですが、賢治はこう説明しています。「実にこれは著者の心象中に実在したドリームランドとしての日本岩手県である。」すなわちイーハトブとは賢治の心象——心の目で見た極楽浄土としての岩手県なのです。更に言えば、極楽とは罪やかなしみのないところではない——罪もかなしみもあるが、それらでさえ、聖くきれいに輝いているのが、本当の極楽なのです。

芸術作品とは普通、きれいなもの、楽しいものを描くように感じられますが、それは単純にきれいなものを描いているのではない。ただきれいなものを描いているだけだったらそんなつまらないものはないでしょう。芸術はむしろ、普通にはきたなく醜いと思われているものの中に、本当の美しさがあり、また、つらく悲しいものの中にこそ、本当の幸福があることを示すものです。

賢治は死ぬ前に、自分の詩や童話の沢山の原稿を弟さんに託すんです。もし機会があつたら出版してくれ、と。自分の原稿は仏さまの教えを書いたものだから、いつか必ずみんながわかってくれる時がくる、と言ったそうです。だから賢治の詩や童話はお経と同じものだといいことです。それを読むことによって、自然の本当の姿を見ることができると。つまり、私たちのこの世界が本当の極楽浄土であり、罪もかなしみも輝いているところだとわかるようになる、ということなんです。そうして、賢治がイーハトブを見つけたように、私たちも私たち自身のイーハトブを見つけたさなければならぬ——それが、賢治の全作品の一番奥に込められたメッセージであると思えます。

（本稿は平成十五年度文教大学公開講座における講演原稿に加筆したものです。）